世界と、5人と

鉄氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界と、５人と

【Ｎコード】
Ｎ１１６０Ｙ

【作者名】
鉄氷

【あらすじ】
現ロシア政権を指示しない反政府軍が欧米、中東への進出を開始し世界の情勢は大きく変わってしまう、世界を救うため５人の戦士が戦場へ向かう！
元ネタ：ＣＯＤ４　ＭＷ・ＣＯＤＭＷ２・ＨＡＷＸ２

御挨拶

今回は非現実的なものを、ということで現代風の戦闘を桜ヶ丘女子高等学校軽音部の５人が戦い、世界を救うというものです。
作者はあんまり兵器の事とか軍事的な物はよくわかりません、ストーリー進行上無理やりな表現等が現れると思われます、ご了承ください。
またこの戦闘系小説は何番煎じかわかりませんが先人様がいることは確かです、しかしこの小説も別のサイトで以前から更新し続けていましたのでパクリ等は一切ありません。（若干他の方の描写に似ている場合もありますが…）
以上の勝手なお願いではありますがご了承いただけたら嬉しい限りです。

１－１　復活

場所：ロシア南西部
露軍パイロット「航空管制、未確認機は単独で尚飛行制限空域を飛行中」
航空管制「了解、警告５を行え」
パイロット「貴機は飛行制限空域に侵入している、こちらの指示が従えない場合撃墜する」
航空管制「もうすぐで禁止エリアだ、セーフティーを解除せよ」
パイロット「了解、セーフティー解除」
航空管制「最終警告を発令せよ」
パイロット「最終警告だ、高度２０００フィートまで降下し、我々の指示に…」
航空管制「フルバック１－１！巡航ミサイルだ迎撃を！」
パイロット「クソっ、おとりか」
航空管制「君の後ろに戦闘機３機を確認！攻撃を許可する」
パイロット「間に合わない…！」

2―1　通達

場所：インド洋沖・空母
ウエイド「今から5時間前、ロシア国内で3年前壊滅した反国家勢力がロシアの空軍基地を攻撃した」
律「またか」
ウエイド「尚ロシア政府よりこちらへの協力要請を認証した、我々はヨーロッパ各国の防衛任務、中東における石油供給基地の偵察が主な任務となる、また日本政府へロシア国内への攻撃の際、補給等の支援を要請してある」
澪「了解です」
ウエイド「このミッションには君たちも…」
梓「わかってます」
ウエイド「…以上だ」
唯「ヨーロッパって美味しい物沢山あるんでしょ？楽しみー」
梓「楽しみじゃありませんよ、これは防衛任務ですからね」
紬「まぁまぁ前ほど激しい戦闘にはならないわ」
律「防衛任務だもんなー、ラッキー」
澪「あんまり気を抜きすぎるなよ、ロシア空軍基地を占領したくらいなんだし」
律・唯「へーい」

3－1　密談

場所：アフリカ
ラブコフ「ロシアの航空基地を制圧しロシアの南西部は我々の支配下になった」
？「ああ、活躍は聞いてるよ、それで、何が欲しい」
ラブコフ「歩兵隊は潤っている、問題は制圧した航空機の武装兵器だ」
？「ああ、わかった、出来る限り早く送ろう、それで約束の作戦は？」
ラブコフ「順調だ、成功すれば大量の資金と軍事力、経済までがこちらに傾くだろう」
？「そいつは楽しみだ」
ラブコフ「そしたらお前も大金持ちさ…」

4―1　出撃

場所：インド洋沖・空母
ウエイド「というわけで君たちはこの偵察機から偵察してもらうことになる、１番機に俺と田井中と琴吹、２番機に平沢と中野と秋山だ」
全員「了解です」
ウエイド「流れとしては中東の基地で補給しさらに北へ進みイギリス空軍部隊と合流する」
律「長い旅になりそうだなぁ」
紬「向こうに行ったらみんなでお茶しましょう」
唯「やったー」
澪「じゃあまた後で」
梓「くれぐれもはしゃぎすぎないでくださいね」
唯「わかってるってー」
律「唯、行くぞ」
唯「じゃあね」

5―1　偵察

場所：インド洋沖・スカイウェーブ2番機
管制官「スカイウェーブ1、2、離陸を許可する」
管制官の指示と爆音と共に偵察機はスピードを上げる
唯「おお！飛んでるー」
律「飛行機だから飛ぶのは当たり前ですよ」
唯「だよねー」
澪「堕ちたりしないかな？」
梓「大丈夫ですよ、頑丈そうですし」
澪「そ、そうだよな」
唯「向こう着いたら何しようかな、食べ物とか、服屋さんとか！」
澪「唯は気楽だな」
唯「えへへ、そう？」
梓「もうちょっと緊張感を持って欲しいです」
唯「流石中野隊長、おきびしいです」

5―2　偵察

場所：インド洋上空・スカイウェーブ1番機
律「あーあ、何か持ってくればよかったなー」
紬「トランプならあるけど…」
律「おお！でかしたぞムギ」
と言っても狭い機内に机はない
紬「ばばぬきならできるかも」
律「隊長もやります？」
ウエイド「いや、俺はいいや」
律「じゃあやろっか」
とトランプを始める
紬「えーっと…これ！」
律「あーまた負けかぁ、ムギ何連勝だよ…」
紬「5連勝くらいかな」
律「もう一度勝負！」
紬「ドントコイデス」

6－1　奇襲

数時間後　場所：イラク上空・スカイウェーブ１番機
ウエイド「あと数分で予定通りストライク空軍基地へ到着する、そこで休憩をとり出発する」
律「何分くらいですか？」
ウエイド「補給が素早く済めば３０分程度だ」
紬「意外と大変なのね」
ウエイド「いつモスクワが攻撃されるかわからんからな」
無線「周囲の友軍機に継ぐ、ストライク空軍基地の北西に位置する渓谷で未確認機を多数確認した、至急帰還し迎撃せよ」
ウエイド「予定変更だ、迂回し近くの基地に避難する」
律「どうしたんですか？」
ウエイド「ストライク空軍基地付近で未確認機が多数発見された、残念ながら対空兵器がないため別の基地に緊急着陸する」
紬「もしかして反政府軍、ですか？」
ウエイド「その可能性も有り得る」
パイロット「まずい、未確認機が１機此方に急接近中！」
ウエイド「回避行動をとり近くの友軍機に応援を頼め！」
パイロット「だめだ、近くの友軍機は全て迎撃に向かっている」
ウエイド「くそっ、奇襲攻撃か」

6―2　奇襲

場所：イラク上空・スカイウェーブ2番機
パイロット「ストライク空軍基地に未確認機多数との通報があった、我々は安全確保のため別の基地に着陸する」
梓「反政府軍の仕業ですか？」
パイロット「わからない、だがこの当たりは戦闘空域だろう」
1番機パイロット「まずい、未確認機が1機此方に急接近中！」
パイロット「奇襲か！？」
澪「敵の奇襲攻撃って…」
唯「大丈夫だよ！見方味方が助けてくれるよ」
パイロット「それが友軍戦闘機は全て迎撃任務中だ、しかも対空兵器も積んでいない」
梓「じゃあ…」
パイロット「全くの無抵抗さ」
唯・梓・澪「…」
パイロット「脱出の用意をしておけ」
1番機パイロット「ロックされた！回避！」
パイロット「フレアを使え！」

6―3　奇襲

場所：イラク上空・スカイウェーブ1番機
フレアを巻きギリギリのところでミサイルを回避したのもつかの間
また敵機の高い旋回で回り込まれてしまう
パイロット「11時方向に敵機を視認、何かに掴まれ！」
そう言い残すと期待は大きく傾き旋回する
咄嗟に座席を抱え込むが倒れてしまいそうなほどだった
2番機パイロット「フレア射出！」
と無線から声が聞こえ隣の2番機から明るい物体が放出される
が、敵機はミサイルを発射せず近接攻撃に移った
パイロット「機銃で撃たれているぞ！距離を取れ！」
2番機パイロット「ダメだ、これ以上速度は出ない」
パイロット「こちらスカイウェーブ1、偵察任務の途中敵戦闘機と
遭遇、こちらの形勢極めて不利」
管制「位置を確認した、大至急そちらに友軍の戦闘機が向かう、耐
えるんだ！」
2番機パイロット「左エンジンの出力が低下している、至急応援を
！」
管制「最低でも5分程かかる」
2番機パイロット「遅すぎる！」
パイロット「まずい、燃料が5分の1を切っている」
その時2番機のエンジンから黒い煙と炎がボワッと噴出した
2番機「エンジン出力低下、炎上している！」
パイロット「友軍はまだか！？」
管制「待て、友軍機は3分早着予定だ」
2番機パイロット「持ちこたえてくれ！」
徐々にスピードを落とし敵の後ろに着く
気付いた敵機は一度旋回し後ろへ回り込んでくる

パイロット「させるか！」
機体は突然急降下を行い一瞬無重力となる
その際少し攻撃を受けたが偵察機の防御力のおかげで大事には至らなかった
友軍「こちらアタックバード、敵機を確認、攻撃指示を」
パイロット「敵機は１機、１２時方向」
友軍「了解した、攻撃を開始する」
偵察機の上すれすれを友軍のＦ１６が高速で通り過ぎる
友軍を察知した敵機は急旋回を始めるが友軍の対空ミサイルが１発直撃し墜落、炎上した
パイロット「応援を感謝するアタックバード」
２番機パイロット「こちら左エンジンの出力０、落下している」
パイロット「着陸態勢を取り緊急着陸できそうな位置を探せ」

7―1　墜落

通信ロスト・スカイウェーブ2番機
パイロット「大丈夫か！？」
唯「大丈夫だよぉ」
梓「私も大丈夫です」
澪「足を怪我したみたいだけど、大丈夫」
梓「ひどい怪我じゃないですか！」
澪「大丈夫だから、心配かけてごめんな」
唯「ここどこかな？」
梓「分かりませんね…」
パイロット「無線も通じないしＧＰＳも使えない」
何とか形は残った機体であったが墜落時の衝撃で機器はほぼ壊れてしまったようだ
パイロット「救難信号で助けを呼ぼう」
きっと近くにはスカイウェーブ1…律や紬が乗っている飛行機が飛んでいて友軍戦闘機も探しているだろう

7―2　墜落

場所：イラク上空・スカイウェーブ1番機
律「どうして撤退するんですか！？」
パイロット「スカイウェーブ2の墜落したあたりは対空砲火が激しく突っ込んだら蜂の巣だぞ」
ウエイド「君たちの親友は必ず救出する、だがそれには兵力を集めなくてはいけない」
紬「わかりました、でも一つお願いがあるんです」
ウエイド「・・・なんだ？」
紬「私を救出に向かわせてほしいんです」
律「ムギ？」
紬「運よく私たちは助かったけど、逆の場合もきっと助けに来てくれる気がするんです」
ウエイド「・・・」
律「私も、行かせてください」
ウエイド「勿論自分たちが死ぬ可能性もあるんだぞ？」
律「大丈夫です、実戦訓練経験はありますから・・・」
ウエイド「わかった、イギリスで兵力を整えるため今は休もう」
紬「ありがとうございます」
律「絶対助けるからな・・・！」

8－1　作戦

２４時間後　場所：イギリス空軍基地会議室
ウエイド「２０時間前、偵察機２機がパイロットの救難信号を探知した、作戦内容は捕虜救出と対空砲の破壊だ、そうすれば基地奪回のための増援を受けることができる」
米兵「支援は？」
プレデタードローンを上空で展開させる、対空砲破壊後はＡ－１０が近接航空支援を実施する予定だ」
全員「了解です」
ウエイド「出発は３時間後、輸送機で最寄りの基地からジープで小隊規模に分かれ接近する、これは奇襲攻撃だ、やってやろうぜ」

8－2　作戦

イギリス空軍基地・Ｃ－１３０輸送機
律「ムギ、調子はどう？」
紬「怖いけど大丈夫、りっちゃんはどう？」
律「私もムギと同じ」
手に銃を持った兵士が静かに肩を並べている
プロペラ機のプロペラ音が大きくなり輸送機はゆっくりと進み出す
もう戻ることはできない、そもそも２人には戻る気さえなかった
律「本当なら今頃買い物とかしてるんだろうなぁ」
紬「そうね、またショッピングセンターに行きたいわ」
律「ここまで来てショッピングセンターかいっ」
３人のことを思うとどうしようもない不安感で押しつぶされそうになる
だからこうして２人、陽気な気分で喋って気を紛らわせているのだ
律「早くムギの紅茶が飲みたいなぁ」
紬「５人揃ったらお茶しましょう」
律「だな！」

9―1　望み

場所：???
反政府軍兵士「ほら、飯だ」
乱雑に置かれた皿の上にはご飯とも言えるのかわからないほぼ残飯のようなものが3人では足りない程に盛られていた
唯「美味しくない…」
梓「仕方ないですよ、いつこうやって食べ物が出てこなくなるのかもわかりませんし、きっと仲間が助けに来てくれますよ」
澪「律…、ムギ…」
梓「澪先輩、食事ですよ」
澪「ありがとう」
静かな食事が終わると壁にもたれる
灰色の冷たいコンクリートの壁が何よりも空しい心境を表していた
唯「本当に助けに来てくれるのかなぁ」
梓「え？」
唯「だって私達がここに連れてこられた時誰も見てないんだよ？」
梓「確かにそうですね…」
パイロット「それなら大丈夫だ」
と、向かいの部屋から声をかけてきた先ほどまで眠っていたスカイウェーブ2のパイロット
今は支給されたご飯を貪り食っていた
パイロット「味方に救難信号は送信済みだ、ＧＰＳやら偵察衛星やらで捜索してくれるだろう、それに」
梓「それに？」
パイロット「ここの近くには航空機が通れる渓谷がある、友軍が防空網を潜る場合は必ずここを通るだろう」
梓「なるほど…」
唯「ってことは助かるんだね！」

パイロット「あくまで推測であって実際作戦を聞いたことではないがな」

梓「少しでも望みがあるなら私達はそれにかけましょう！」

１０－１　お礼

「り…ん、りっちゃん…」
律「う、ん…」
紬「おはようりっちゃん」
律「寝てたのか、私」
紬「基地に着いたわよ、降りて助けに行かなくちゃ」
後方のハッチからＭ４を片手に降りる
作戦部隊の殆どは狭苦しい飛行機から降り、中東の空を楽しんでいた
目線を右の門にやると輸送トラックが３台、それにＭ１Ａ２戦車が
一台待機していた
そして次に左の滑走路に目線を移すと支援予定のＡ－１０Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｂｏｌｔが３機、更にその奥には昨日見たＦ－１６Ｆ・ＦＡＬＣＯＮが複数機待機していた
米兵「アタックバード隊の支援だとよ」
律「アタックバード、って確か私たちを助けてくれた飛行機だよね？」
紬「確か、そうだったような…？」
律「ちょっと見に行ってみようぜー」
紬「あ、りっちゃん待って！」
好奇心で走っていきＡ－１０の横を超えＦ－１６に近づく
律「おお、かっけぇ！」
紬「勝手なことして怒られない？」
律「大丈夫大丈夫、お礼言いに来ただけだから」
しかし改めてみると全員以外とイケメンだったりする
律「あ、あのぉ」
知らない人、まして他の国の人に声をかけるのは律でも少し緊張する
パイロット「ん？誰？」
律「あ、昨日の偵察機に乗っていた田井中律と言います」

パイロット「あ、偵察機に乗ってた子か、大丈夫だった？って友人を助けに行くからそんなわけないか」
二人「ありがとうございました」
パイロット「流石日本人だ」
律「え？」
紬「行きましょう、準備してるわ」
律「じゃあ失礼します」
パイロット「友人にもよろしく伝えてくれ」
律「はい」

１１－１　作戦開始

輸送トラックの１台目に乗り込むとトラックは動き出す
どうやら私達が最後だったようだ
最後尾にはＭ１Ａ２戦車が護衛任務に就いている、ものすごい迫力だ
しかし砂漠の道と言うのは乗り心地が悪い、輸送機の中でもお尻が痛かったが今回は度が違う
しかしまたここでも兵士は黙ったまんま、それだけは何ら変わりなかった
しばらくしてから運転手が口を開いた
運転手「今から渓谷を通過する」
ウエイド「了解、周囲に目を配れ」
もうすでに戦闘は始まっている、いつ迫撃砲で撃たれるかわからないからだ
管制「プレデタードローンが上空に展開している、ＩＲストロボを点灯させよ」
ウエイド「全員友軍に吹き飛ばされたないならくストロボを点灯されろ」
ストロボのスイッチを入れポケットに突っ込む
管制「ああ、友軍のストロボを確認した、この先の敵地に砲台がいくつか見える」
運転手「どのくらいだ？」
管制「あー、３ｋｍくらい先だ」
運転手「射程圏内か」
管制「今攻撃命令を要請中だ、待ってろ」
運転手「了解」
管制「…よし目標への攻撃に許可が下りた」
ウエイド「気をつけろ、捕虜を殺してしまっては話にならない」
管制「わかっている、タイミングを知らせてくれ」

運転手「待機しろ、射程外へ進む」
管制「了解」
運転手「攻撃と同時に確保へ向かう」
運転席の無線から流れる緊迫した通信は兵士たちの耳にも届きさらに緊迫した空気が漂う
戦車指揮官「所定の位置に着いた、航空支援を待機中」
運転手「よし、位置に着いた、やってくれ」
管制「ションベンちびるなよ！」
と管制のジョークと同時に遠くで白い雲が一つ、下に落ちていく
管制「ターゲット破壊を確認した」
と同時に遠くで爆音が聞こえる
ウエイド「よし、ドローンが砲台を破壊してくれた、君たちは破壊した穴から反政府軍領へと進行し捕虜救出とＳＡＭ破壊工作を行ってもらう」
作戦開始

11―2　作戦開始

ウエイド「行け行け！敵の増援が来る前に捕虜を救出しなければならん」
２人も後に続き破壊された砲台を横目に進む
が持っている銃が重たい、Ｍ１６からだいぶ小型化が進んだＭ４だがまだ２人には重い
律「はぁ、はぁ、はぁ、ムギ、大丈夫か？」
紬「えぇ、私は平気」
ドラムセットやアンプを軽々と持ち上げる怪力の持ち主のムギにとって小銃など苦でもないのだろうか
占拠された町に住人の姿はなく、物静かだった
ウエイド「気を抜くな！どこかで待ち伏せをたくらんでいるかもしれない」
市内戦と言うのは四方八方に目を配らなくてはいけない
時には一般市民にさえ銃を向けることになるのだ
米兵「市民がいないだけマシさ」
と隣の米兵は呟いた
律「チェックポイントアルファまでは確保、更に南進しブラボーへ向かう」
ウエイド「了解した、Ｍ１Ａ２エイブラムスが制圧に向かう、道を開けろ」
すると後ろから振動と共に先ほどの戦車が姿を現す
律「すげぇ…」と思わず感激してしまうのも無理はない、こんな近くで見たのは今が初めてだからだ
戦車砲手「スモークで攻撃地点を指示してくれ」
米兵「了解、君たちスモークグレネードはあるか？」
紬「あ、はい、ここにあります」
米兵「すまんが３つほど分けてくれ」

紬「よいしょっと、はい」
米兵「ありがとう」
紬「いえいえ」
律「いつの間に用意してたんだ？」
紬「とりあえず一色持っていこうと思って」
律「やけに準備いいんだなぁ」
紬「りっちゃんは持ってこなかったの？」
律「忘れた」

１１―３　作戦開始

場所：？？？？
ドーン…
梓「聞こえましたか？」
唯「うん、爆発音っぽいね」
澪「もしかしたら…」
３人「救助！？」
そう、それはプレデタードローンが放ったヘルファイアミサイル対地ミサイルだった
兵士１「北の砲台に攻撃を受けたらしい！」
兵士２「奴らの反撃か」
兵士１「とりあえず応戦するぞ」
とＡＫ―４７を担ぎ走っていく兵士たち
梓「でも出られませんね…」
パイロット「大丈夫さ、いずれ救出部隊が出してくれる、しばらくの辛抱だ」
梓「はい！」

12－1　目撃

律「あー喉乾いたー」
紬「私の水筒にも残ってないわ」
律「敵居ないんだったらこんなにゆっくりと行かないでいいじゃん」
紬「油断は禁物よ、りっちゃん」
さっきから敵影はなくどことなく緊張した空気が抜けている気もする
律「ポイントブラボーまで敵影なし、集合地点へ向け前進する」
ウエイド「了解、先ほど先行しているハンター2－1が不審者を目撃との情報が入った」
律「どのあたりですか？」
ウエイド「次の突き当りを左、少し進んだ学校付近だ」
紬「確か小学校よ」
律「了解しました、警戒を続けます」
紬「小学校が戦場って少し抵抗があるかも」
律「住人は避難したっぽいし大丈夫だよ」
紬「そうだといいけど…」
いまいち気の残らない紬を他所に先行する部隊を追いかける律

13－1　銃声（前書き）

１３－１　銃声

紬「あれが学校ね」
律「私たちの学校とは全然違うな」
紬「澪ちゃんたち、どこにいるのかしら…？」
律「そうだな…あそこの建物怪しくないか？」
紬「あそこのお店が？」
律「なんとなくだけど、いる気がするんだよなー」
ウエイド「ブラボー地点付近の校舎前へ集合しＳＡＭ破壊工作と捕虜救出を行う」
全員「了解」
ウエイド「赤外線カメラでの捜索も行うが数に限りがある」
律「私たちの部隊には配布されないだろうな」
突然作戦に投入された部隊になんぞ特殊部隊じゃない限り優遇はされないだろう
ウエイド「開始」
そんなこんなで捜索作業が始まる
律「それじゃああの店に行ってみるか」
と先ほど怪しいとマークしておいた店へ近づく
紬「あまり迂闊に動くと…」と言い終わる前にどこか遠くで、銃声が聞こえた

13―2　銃声

律の目の前の花瓶が物凄い勢いで割れる
紬「りっちゃん隠れて！」
と言う叫び声が聞こえ咄嗟に近くの車に隠れる
紬「捕虜捜索の途中で敵のスナイパーと遭遇！銃撃されています」
ウエイド「了解、総員敵兵への攻撃を許可する」
紬「りっちゃん！頭出さないで」
まだどこから撃たれたのかはわからない
恐らくドラグノフだろう
着弾と銃声のずれが少なかったこと、ドラグノフの射程からしてさほど遠くはないだろう
米兵「場所を確認できない！もう一度撃ってくれれば…！」
律「それなら…」
横にある衣服店へ伏せながら前進し一つ衣服をはぎ取った
それを持っているＭ４に巻き付け車の影からそろりと出す
バシン！と目の前の地面が砂煙と同時に穴が開く
米兵「あそか」と無線で落ち着いた声がした後銃声が３回、違う銃声だった
米兵「やったぞ」
律「よっしゃ！」
紬「りっちゃん…」
とムギも安心した顔を見せる
ウエイド「気を抜くな、恐らくあいつは偵察兵だ」
律「ってことは…」
ウエイド「敵の部隊はまた別に居る可能性がある」

１４－１　傷

パン！パン！パン！
と近くで銃声が聞こえる
この銃声が友軍の物か敵軍の物なのかはわからない
ただ今一人誰かが撃たれ命を落としたのはなんとなくわかった
唯「どうしたんだろう…」
３人とも心配の色が隠せない
いつ自分たちが危機にさらされるかなんて予想がつかない
澪「き、きっと味方だな！増援が来たっぽいし…！」
パイロット「ああ、銃声的にＭ４だろう」
７．６２ｍｍ×３９を発射するＡＫ－４７と５．５６ｍｍ×４５を発射するＭ４では銃声も、威力も全く違うからだ
梓「そういえばなんで銃について詳しいんですか？」
パイロット「昔海兵隊にいてな、少しばかりはわかるぞ」
梓「そうだったんですか」
パイロット「それで俺がうっかり敵の射程内へ踏み入れてしまってバーンと１発撃たれたわけ」
と冗談を交えつつ腹部にある傷を見せてくれた
言わずとも澪はミエナイキコエナイと壁へ寄って行ってしまったが
唯だけは興味津々であった
唯「おおカッコいい！なんか戦った男、って感じだね！」
梓「何言ってるんですか…」

15－1　救出

他の部隊が敵の捜索へ当たっているうちに先ほどの店へ入る
紬「それらしき物はないけど」
律「うーん、気のせいだったか」
紬「次のお店に行きましょう」
律「もうちょっとだけ探してみる」
紬「ねぇ、このドア怪しくない…？」
律「確かに、いかにも！って感じだな」
紬「開かないわ…」
律「おーい誰かいるのか？」
ドンドンと扉を叩く律
？「…律？」
律「え、澪？」
澪「律なのか？」
律「澪！唯と梓も一緒なのか？」
唯「大丈夫だよ！」
梓「私も大丈夫です」
律「どうやって開ける？」
紬「Ｃ４か何かあればいいんだけど…あった！」
律「どんだけー」
紬「みんなできるだけ離れててー」
壁にＣ４を貼り付け外に出る
紬「よいしょ！」
カチッ
律「おーい、スイッチ切れてるぞー」
紬「あら、いけない」
時々、唯と同様に天然なこともある
律「気を取り直して」

紬「よいしょ！」
ドーンと凄まじい音と煙が舞い上がる
律「お見事！」
ドアは粉々にはならなかったものの穴が開いて倒れていた
澪「律ぅ、ムギぃ」
律「大丈夫だったか？」
澪「あ、あぁ」
梓「律先輩！ムギ先輩！」
唯「お久しぶりです、りっちゃん隊長！」
律「唯隊員のためならこんな事朝飯前！」
唯・律「ハハハハハ！」
澪「ほら、行くぞ」
唯「ほいほい」
律「はいはーい」
唯「あ、もう1人忘れてるよ」
そう、先ほどまで話してしたパイロットを助けてないのだ
紬「離れていてください」
今度は失敗することもなく、コンクリートの壁に大穴が開いた
パイロット「げほっげほっ、ありがとう助かった」
律「いえいえー」
澪「お前が言うな」
律「いやいや、ここ当てたの私だし！」
まだ煙たい店を多少の怒りと罪悪感を残し出る
律「捕虜の救出に成功しました」
ウエイド「了解した、救出した捕虜の健康状況を確認次第医療班を派遣する」
律「４人共大丈夫か？特にウエストとか…」
澪「律、今なんて言った？」
律「え？あ、その…痛いっ」
澪「いつも一言多いんだよ」

パイロット（面白い子達だなぁ）
ウエイド「…で大丈夫なのか？」
律「大丈夫なようです」
ウエイド「了解した、可能であれば前線での警戒任務に就いてほしい」
澪「私は大丈夫だけど」
梓「私もです」
唯「りっちゃん隊長に着いていきます！」
律「よしきた！って唯たち銃持ってないのか」
パイロット「そうだったな」
紬「サブウエポンは２つしかないし…」
唯「大丈夫！なんとかなるよ」
律「唯の大丈夫は信用できないからなぁ」
唯「ぶーぶー」

15―2　救出

ウエイド「補給部隊が到着するまで3人は待機せよ、田井中と琴吹は4人の護衛だ」
律・紬「了解」
パイロット「悪いが俺は基地に戻らして貰う」
唯「えー何で？もっと話聞きたいよ！」
パイロット「俺はパイロットだ、海兵隊だったのも昔のことだ」
梓「そうですか…」
パイロット「また会えればいいな！」
澪「では私達は任務があるので」
唯「ばいばーい」
パイロットと別れを告げる今来た道を引き返し破壊された砲台の方向へ向かう
律「ん？どうした澪？」
澪「いや、墜落した時に足擦り剥いちゃってさ」
律「痛々しいなぁー、ムギー医療キット持ってないか？」
紬「消毒液とガーゼくらいしか…」
澪「十分だろっ！」
紬「じっとしてて」
手慣れたように消毒をしガーゼを上から被せる
澪「ありがとうな、ムギ」
紬「どういたしまして」
律「よっしゃーいっくぞー」
梓「はしゃぎ過ぎですよ」
唯「疲れたー」
梓「早っ」
唯「だってー最近美味しい物食べてないもん」
梓「そういえば確かに食べてませんね…」

律「おかげで澪は体重が減ってたりしてな！」
澪「え？本当かな！？」
律「真に受け過ぎだよ！」
唯「あーあ、どこかにマシュマロ鍋ないかなぁ」
梓「あるわけないですよ」
唯「ちぇっ」

１６－１　攻撃

次に大きな音が聞こえたのはちょうど補給部隊から兵装と物資を預かった時だった
米兵「地雷だ！」
かなり緊迫した空気が無線から伝わってくるのが分かった
ウエイド「負傷者は？」
米兵「ありません、しかしエイブラムスが走行不能！」
ウエイド「了解した、全部隊はエイブラムスの援護に回れ」
梓「行かないといけないっぽいですね…」
再びこの場に緊迫した空気が張る
律「行くか」
先ほどまでの空気が嘘のようだ
重いＭ４を担ぎながらまた廃墟の街を進む
スナイパーがいたベランダを通り衣服店を過ぎ破損したエイブラムスの所へ向かう
律「状況は？」
米兵「この先に敵影が複数目撃されている、技術者が到着するまでここに止まり防衛する」
管制「悪い知らせだ」
ウエイド「なんだ？」
管制「敵のＴ－７２戦車が接近中だ」
米兵「対戦車兵器はあるか？」
律「さっき補給部隊のトラックに積んであったんだけどなー」
米兵「間に合わないか」
管制「待て、プレデタードローンがオンラインだ」
米兵「了解、ポインターで指示した場所に一発ブチ込んでやってくれ」
管制「目標を視認した、総員伏せろ」

米兵「来るぞー」
空気を切り裂く音と共に数百メートル先で爆発した
管制「目標撃沈」

１７－１　銃撃戦

燃料とゴムが燃えた匂いが周囲に漂った市内を銃を構えながら進む
少し歩くとＴ－７２戦車の破片が散らばり燃えていた
米兵「止まれ」
片手で制止され何事だと思いつつ従う
米兵「見えるか？」
指を指された方を見てみる
米兵「武装しているか？」
梓が目を細めて見つめている
梓「どうでしょう、長い棒のような物を持ってるような…」
律「こういう時に限ってスコープ持ってきてないんだよなー」
唯「手を振ったらいいんじゃないかな？」
澪「確かに敵か一般市民か見分けるのに使われてるらしいけど迂闊な事…」
唯・紬「おーい」
律・澪・梓「振ってるー！」
唯「あ、立ち止まった」
米兵「どうやら潔く思ってなさそうだな、伏せろ！」
ダダダと大きな銃声と頭上をかすめる弾丸の音
時々目の前の地面に砂埃が舞う
米兵「応戦しろ！」
何も隠れる物がない路上は危険すぎる
セレクターレバーをＳＥＭＩにし大よその狙いを定め引き金を引く
当たった？のかはわからない
だが敵の姿は倒れ見えなくなった
もしかしたら５人全員実践で引き金を引いたのは初めてかもしれない
米兵「やったぞ」
相手の弾幕が止んだところで体を起こす

すぐさまＴ－７２戦車残骸に身を隠す者もいれば近くの民家の玄関に体を隠す者もいる
ウエイド「偵察部隊から２００メートル先に敵部隊を目視したとの報告が入った」
管制「ああ、見えているがヘルファイアミサイルはオフラインだ」
紬「戦車が使えないとなると私達だけね」
唯一の支援も受けられない今、頼りは自分の腕だ
ウエイド「敵を十分に引きつけＣ４を起爆させろ」
米兵「１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１…」
カウントが終わりきる前に周辺のＳＡＭに仕掛けたＣ４が爆発する
米兵「やれ！」
敵が怯んでいるうちに攻撃を仕掛ける
５人は全てＴ－７２に戦車の残骸に身を潜めていた
さっきは夢中だったけどいざ真正面から先頭になると胸がバクバクして銃が握れない
周りの味方の撃つＭ４の銃声と排出された薬莢の音がより一層、リアルさを増していた

17―2　銃撃戦

５人は戦車の残骸を盾にして隠れていた
時々鳴る銃声、薬莢の音
そして物が燃える臭いと火薬の臭い
異様な空気が辺りを包む、これが戦場なのだ
しばらくすると銃声が鳴りやむ
米兵「撤退か？」
ウエイド「いや、恐らく戦線の立て直しだ」
それは次にまた攻撃があることを示している
すると律が突然立つ
澪「律…？」
律「私だって人を撃ちたくはないけど、やらないとやられるから」
そう呟いた律はＭ４を戦車の車体に置きサイトを覗き込んだ
管制「敵が再編成して１０人程度接近中」
ウエイド「家に帰りたいなら殺される前に殺せ、いいな？」
米兵「１時方向、敵兵を目視」
タタタと銃撃戦が始まる
最初の戦死者は相手方だった
律「１人やった」
それは律が人を撃ち殺したということなのだ
マガジンを上下入れ変えまたＭ４に差し込む
ビニールテープでマガジンを固定しリロードタイムを短縮させるという知恵なのだ
またＭ４にはボルトリリースレバーが組み込めれているため、リロードが容易である
律「澪大丈夫か？」
澪「律は、律は怖くないのか？」
律「さっきも言ったと思うけどやらないとやられるから」

澪「そんなものなのかなぁ」

17―3　銃撃戦

ウエイド「M1A2にはM2ブローニングとM240があるぞ」
米兵「よしエイブラムスまで後退するぞ」
先頭集団が武器を構えたまま後退する
勿論5人もエイブラムスまで後退する
唯「澪ちゃん歩ける？」
澪「歩けるよ」
3人がかばう中、律は最後まで警戒を続けていた
ウエイド「田井中、砲台のM2に、秋山はM240だ」
律「私達がですか？」
ウエイド「そうだ、君たちはまだ小銃の扱いには慣れてないだろう？」
律「そうですけど…」
ウエイド「使い方はわかるな？」
律「なんとなくわかります…」
ウエイド「秋山！」
澪「は、はい！」
ウエイド「使い方はわかるか？」
澪「恐らく…」
ウエイド「まぁいい、総員戦闘準備」
律「軽いなー」
米兵「来るぞ」
M2ブローニングの銃口が敵に向く
米兵「撃てー！」
タタタとM4の銃声とドドドという大きな音と共に火を噴くM2
不意に出てきた敵兵の頭が弾けた
澪「うっ」
唯「澪ちゃん！？」

痛い物や怖い物が苦手な澪にとって人が死ぬというのは酷だろう
まして血を吹き出しながら倒れる敵兵なんて見たら澪以外でも目を
瞑ってしまう
律が撃つＭ２ブローニングの１２．７ｍｍ弾は確実に敵兵の命を奪う
撃ちすぎた銃身はヒートし煙が立ち上っていた
ウエイド「射撃やめ！」
律「はぁはぁはぁ」
息を切らした律が座り込む
澪「げほっげほっ」
紬「澪ちゃん！」
梓「澪先輩！」
えずいた澪だったが飯もろくにない環境で胃から出す物なんてない
唯と紬と梓がかばうなか、律はばつが悪そうに見ていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1160y/

世界と、5人と

2011年11月1日04時37分発行